

音楽的知覚に関する研究 (Ⅷ)

——色聴所有者の人となりと反応の分析——

古 矢 千 雪

Studies in Musical Perception (VIII)

——Analysis of Response and Character of Color Hearer——

Chiuyuki FURUYA

共感覚的反応（特に色聴反応）をもつと思われる人物を予備調査で選出し、生育史や性格検査等から描けるその人となりを把握することにより、色聴反応をもつ人物にみられる人格的特性を明らかにすること、また、色聴に関する体験談や色聴実験等により、色聴反応そのものの分析を行なうことを目的とした継続的研究を行なっている。前回の報告（1985）に登場する被験者を Case C としたので、今回の被験者は Case D とする¹⁾。このような事例報告としては、第3報目になる。

方 法

1. 被 験 者

Case D: F. K. 20才 女子短大生

2. 色聴実験の音楽刺激

喜 多 郎：シルクロードより

被験者の好みにより、この曲を選んだ。音楽はテープに収録されたものを、ステレオ・テープレコーダーで再生し、音量は被験者の好みに合わせて調整した。

3. 生 育 史

個人面接により、幼少時の記憶に残る情緒的体験や、色聴に関する体験を想起させた。

4. 性格検査

ロールシャッハ・テスト、Y-G 検査、CAS、GAT を実施した。

5. 視覚的記憶と視覚イメージ作りに関する調査

質問紙による調査と個人面接により、視覚的記憶の再生の可能性について検討した。また視覚的なイメージがどの程度鮮やかに作れるか調べた。

6. 面接・色聴実験・性格検査の実施場所

いずれも筆者の研究室において実施された。前回までの被験者と同様、日頃からコンタクトをもち、いずれもリラックスした状態で行われたものと思われる。

色聴実験は今までと同様、被験者のコンディションが良い時を選んで実施された。自由な姿勢で目を閉じた状態でいき、音楽が終了した後、内省報告を求めた。

結 果 と 考 察

1. 色聴反応の内容

雪の山……夜明け……山の家……鳥が鳴いて、水が流れて……、朝食をたべて子供が学校へ行く、学校へ行って、友人がケガかなにかあって、さみしい思いをした。冬景色のためか、寒い。

霧がかかっていて……女の人が歩いている。部屋に入っのんびりして……暖炉がもえている。外を見ると、女の人が霧の中に消えていく。小さくなっていく。寒い、冬だから。

単音の刺激として、モンテソーリの感覚教具のベルの音を呈示したが、反応はなかった。音楽刺激としては他にも呈示したが、反応はなかった。イメージはよく浮かぶが、共感覚的反応はないという。

2. 色聴の現われ方

今までの被験者と同様、今回の被験者も、音楽をきいていろいろなイメージを作る（あるいは思い浮かべる）ことはできる。しかし音楽をきくといつもイメージが浮かぶわけではなく、何も考えずに単に音楽を楽しむだけであるが、ふと、いろいろな場面を想像することはある。普段、音楽をきいて何かを想像するとか、

頭の中にイメージを思い浮かべるということは、なかった。特に記憶がない。中学校や高校の音楽の時間に音楽鑑賞があったが、よく記憶していない。少しはイメージが浮かんでいたのではないかと思うが……。

イメージについてがこのようなことから、過去の色聴体験は、ときかたでも、全く記憶にない。ただ、イメージが非常に鮮やかであった時、見えていたのかもしないと、今は考えている。

今回実験してみて、イメージとして考えているのではなく、実際に見えているのを確認した。色彩はないようであるが、まるでテレビで長い物語を見ているように、場面が流れていく。見えている場面は一見テレビ的であるが、遠近感があり、実際の場面を見ているようである。音楽の中に自分が入りこんでいる感じである。

音楽をきいて何かが見えるという場合と少し異なるが、最近ピアノを弾く時、レッスンの先生から、イメージを思いうかべて弾くように、と指導をうけた。イメージを思い浮かべるように努力し、イメージがはっきり浮かんでから弾くようにした。かなり努力した。すると、時々ではあるが、そのイメージが実際に見えるようになった。色聴実験の時と同様、普通に見るように見えるが、視野は狭くなっており、色彩はない。

今回の被験者も前回までの Case A, B, C と同様、イメージと実際に見える色聴とは区別できていると思われる。また、音楽と一体になるような状態になって色聴反応が生起する点も、過去の3者と共通していた。

そして見え方は、目を閉じているので何も見えないはずであるが、具体的な場面が、動きを伴って現われ、まるでテレビを見ているように見える、と表現している。ただ、今回の被験者は、色彩を感じないと報告した。暖炉がもえているから、炎の色はイメージできるが、実際には色がついていないという。

今回の被験者の報告の中で、イメージを明確に作ろうと努力しているうちに、見えるようになった、という内容は、一種の自己暗示と考えてよいのであろうか。

被験者は、音楽刺激として自分の好みの曲を選択した。選んだ曲は、普段好きで聞く曲という意味はなく、音楽に入りこみやすいものだという。テンポは遅く、電子的な合成音が身体や心を包みこむような音楽、その音をききながら、被験者は、自分自身に暗示をかけ、催眠状態と同じような心の状態になり、幻覚を見たのであろうか。

色聴の現われ方というか、被験者にとってのその主観的経験は、視覚的イメージと幻覚との中間に位置するであろう、と M. クリッチェリー (1977) は色聴について紹介しているが、今回の被験者は正にその体験を示してくれたといえよう²⁾。

3. 視覚的記憶に関して

前回の報告の中で述べたが、Case B, C の色聴反応の中に、まるで過去の視覚的記憶が、音楽刺激を誘発要因として、再生されたかのような内容のものがあった。この反応内容を、単純に、記憶——再生のプロセスでとらえるか、または記憶のなされた前後に体験されたさまざまな心的反応等の、一連の心的連合(学習)として考えるかという問題がある。色聴は生れつきの感覚的な能力として存在するか、あるいは条件づけのような学習の結果として存在することは、以前からもいわれているが、視覚的記憶の再生という考え方は、普通なされていない。

視覚的記憶に関しては、直観像がある。短期記憶の中に入るが、感覚とイメージとの中間位置を占める現象で、文字通りの意味で、見られる現象である。しかし、ここに登場する被験者の場合は、長期記憶の再生に相当するのであるから、直観像を見ているとは、言い難いが、視覚的対象が現存しなくても見える、という状態は同じである。

筆者は直観像を見た記憶はない。また、かなり以前には色聴体験があった。視覚的イメージを作ることは、いつでも、何でもというわけにはいかないが、かなり鮮明に出来る。しかしイメージである限りにおいては当然見ることはできない。ところが、先ほど述べた視覚的記憶(長期記憶)の再生は、時々体験している。再生された像はほんの一瞬で消えるが、その一瞬見た像の記憶により、これは短期記憶に属すると思うが、見たものの確認を行うことができる。色彩は鮮かな時もあれば、あまり色を感じない(印象が乏しいという意味)場合もある。直観像を見た記憶がないので比較ができないが、多分直観像は目の前、普通に見えているように見えるのであろうが、筆者の再生像は、心の中というか、頭の中に写し出されるような形で見えるのであるから、目の前に見えるという印象はない。しかし Case B, C の場合は目の前に見えるという表現をしている。色聴現象を記憶の再生と関連させて考えるのは、もう少し被験者が増えることが必要である。

Case D について、視覚的記憶の再生の体験がある

か否か質問すると、高校1年の時、友人であるが普段しゃべったこともない人(クラスメイトの程度という意味)の顔が、急に浮んできて、今のは誰かしら、あの人なんだけど、どういう人だったかしら、という風に思い出していったことが2度ほどあった、という答であった。この体験は、筆者のものとよく似ていた。現在は、過去の記憶を視覚的に再生することは体験していないという。普通の記憶から、イメージを作っていくことはあるし、作れといわれれば出来るという。

4. 視覚的イメージについて

被験者がどの程度鮮明にイメージが作れるか、質問紙とインタビューを実施した。

あなたは、次のものを、どの位はしっかりとイメージとして思い浮かべることが出来ますか? 実際にやってみて下さい。そしてどの程度イメージできたか、答えて下さい。

- a. 親しい友人または親の顔
- b. 最近会った人の顔
- c. 自分の家のどこか
- d. 最近見た建物
- e. 最近食べた食事
- f. 最近見た風景
- g. 小学校の修学旅行で見た風景
- h. 犬または猫
- i. 桜の花

aのイメージ(母の顔)、bのイメージ(友人の顔)cのイメージ(自分の部屋)いずれも、実際見ているように鮮やかにイメージできたという。dとeのイメージは、何かものについて考えているだけで、全くイメージはないと回答した。fのイメージ(近くにある公園)、gのイメージ(アソ山)は、かなりの鮮やかさであるが、a・b程ではなかった。hのイメージは柴犬で、a・bと同じく鮮やかであった。犬や猫は好きだと言う。iのイメージはg・hと同程度で、桜並木をイメージしたという。

これらのイメージは作られる情報が多ければ多い程、明確になることをよく示している。最近見た建物や食事に関しては、この被験者は情報をたくさん持っていなかったのであろう。しかし全体的に見て、この被験者は、視覚的イメージは鮮明であるといえる。

5. 生育史

両親ともにクラシック音楽が好きで、母がレコードをかけていたので、よく耳にしていた。小さい頃、母が歌うのが好きで、よく歌ってくれた。子守り唄などもよく歌ってもらった。お話の本もよく読んでもらっていた。しかし、かわいがられた、という気持ちはなく、兄の方(2才上)がかわいがられていたと思う。けんかしても、私の方が悪いと、いつも言われていたから。

小さい頃の思い出といっても、あまりいい思い出はないが、母の歌、毎日昼寝の時等にうたってくれたことは思い出になっている。

本は小さい頃は読んでいなかった。中学の時父から元全日本バレーボールの松平さんの本を買ってもらってから、そのような傾向の本をよく読むようになった。気に入った本はくり返し読み、自分が主人公になったような感じがした。本を読んでいると、母がレコードをかけて、音楽が流れていて、きれいだった。

小さい頃(4才頃)ピアノを習っていたがやめてしまい、高校3年の時またやりはじめた。兄がロック・バンドをしていて、自分もバンドに参加し、ヴォーカルを担当している。昨年うたっている時、曲に乗ったというか、自分の心の中にある悲しみと同調したのか、泣きだしてしまった。その曲は好きだ。学校での音楽の時間は別に嫌いだったということもないが、寝ていたと思う。音楽鑑賞の時間もあったが、少しはイメージがわいたとは思いますが、印象が薄い。

今回のCase Dは、小さい頃の楽しい思い出はないという。母親に昼寝の唄をうたってもらったり、本を読んでもらったという思い出はありながら、兄の方がかわいがられていた、という思いの方が強く心を占めているようだ。この思いがパーソナリティに何か影響を及ぼしていると思われる。

被験者は高校から現在まで、よく音楽をきいているが、フォークやロックが多く、たまにクラシック音楽特にオーケストラの演奏を聞くと答え、きいている音楽の中に自分が入っていくような感じ、音楽との一体感がよくあることを明らかにしている。また最近、好きな音楽をきいている時、よく頭にイメージがうかぶことも指適している。このことから、音楽を通じての被験者は、感受性の強さや想像力の豊かさがあるといえるのでなかろうか。

6. 性格検査

1) ロールシャッハ・テスト

集団検査は1度うけているが、個人検査は今回ははじめてである。通常のインストラクションで、10枚すべてのカードに反応があった。

Total 反応数=43, 平均 R. T.=2'40", 平均 R₁. T.=0.30" であった。反応領域は W, D, d, S の全てにわたっていた。反応決定因は運動, 色彩, 形態, 陰影などさまざまである。

自由反応段階の反応と、吟味段階での説明を整理して次に記す。

カード I

- 4" △ きつねの顔。全体できつねの顔の形。耳、鼻。(W, F)
- △ こうもり。形でそう見える。色も黒いから。羽根、顔、胴。(W, FC')
- ◎ (ぐるぐるまわす)
- △ 犬の横顔。あけた目、耳、口。(D, F)
- 1'07"

カード II

- ◎ (ぐるぐるまわす)
- 40" V カニ、いやエビの頭。赤い所。赤いからエビ。エビの頭のトゲトゲしている所 (D, CF)
- ◎ (ぐるぐるまわす。浮かばない、だめだと言う)
- △ 小犬が2匹。みた形がそうだから。(D, F)
- △ ゴリラが座っている。これが座っている足。これがゴリラの口。(D, FM)
- △ 象。赤い所を除いた所、さっきの犬に鼻をのばしたら象。(D, F)
- 3'28"

カード III

- 4" △ 女の人がかごをもっている。バストがあるから女の人。(W, M)
- △ 何かの顔に見える。(ぐるぐるまわす)
- 魚の頭の部分。これが目、口。(DS, F)
- ◎ (ぐるぐるまわす)
- △ かたな。これがもつ所。ここが刃。(D, F)
- △ 赤いリボン。(D, FC)
- 2'55"

カード IV

- ◎ (ぐるぐるまわす)
- 2'.00 > 白鳥の頭のところ。細くのびた所 (d, F)

> 虫の幼虫。そんな感じ。(D, F)

V がの頭。見た感じ。(D, F)

(この図はよくみえない)

4'06"

カード V

- 6" △ が。全体のみた感じ。(W, F)
- △ ワニの口。この細くなった所。口のところだけ。(d, F)
- < ビンセット。ここの細く出た所。(d, F)
- V やり。細く、とんがっているから。痛い感じ。(d, F)
- 3'00"

カード VI

- 14" V てんぐ。目があって、高い鼻があって。(D, F)
- △ ギターか三味線の柄。先の方だけ。形が似ている。(D, F)
- < スケートのくつ。中央の線のところがエッジになっている。(D, F)
- V 角。小さく出ている所。(d, F)
- V 小さい幼虫。頭と目と触覚のような所。(d, F)
- 2'19"

カード VII

- ◎ (ぐるぐるまわしている)
- 18" < 犬の顔。目と口と鼻と。(D, F)
- < 犬の全体の姿。顔と胴体としっぽ。(D, F)
- V アメリカ大陸。形がそう。(D, F)
- ◎ (ぐるぐるまわす。形が少ないから、それだけしか見えない)
- 1'47"

カード VIII

- 10" > ネコ。色がついている所。これは、はっきりみえる。(D, F)
- △ 木のてっぺんの方。形がそうだから。ゆっさゆっさとゆれている。(D, Fm)
- △ 人間の手とネコの手。あやしているみたいにみえる。手の形をしている。(d, F)
- △ 犬の顔。白黒の犬で、耳が黒い犬。ネコをじっとみている。(d, FM)
- △ 人の顔。これが髪だから。髪が長くて、幼い女の子。じっとみると、ないているみたい。外に出られない感じ。暗い部屋にとじこめられている。青白い色からそれを感じ

る。(d F) (Csym)

2'12"

カード IX

◎ (ぐるぐるまわす)

1'04" V 木。葉の色と木の幹の色。形も。(W, CF)

V その木の上に家がある。これが家。これが窓。こういう木の上の家は好き。(D, F)

Λ 魔女。マンガ的な形をしている。(D, F)

> 大きく口をあけた顔。これが頭の所、目で口。(D, F)

2'59"

カード X

18" Λ くもが2匹。ごちゃごちゃした形からくも。(D, F)

> ペンチ。歯をぬくやつ。形です。(D, F)

> 黄色い虫。これは色から。目の大きな虫。(D, CF)

Λ 幼虫。形がそうだし、目と口がある。色も幼虫という感じ。(D, FC)

Λ 何かの花が咲きそうな感じ。黄色からそう見える。一枚花びらがひらいているから、咲きそうにみえる。(D, CF)

< 動物だと思うけど。針ねずみ。形がそう。さわると針が出そう。(D, F)

< これが木の幹。さっきの黄色い虫がのぼっている所。ざらざらした、でこぼこがある。色の濃淡があるから。(D, Fc)

2'50"

主な反応決定因: M=1, FM=2, Fm=1, F=30,

Fc=1, FC=2, CF=4

上記の反応決定因は、一次的な決定因のみを分類したもので、副次的な決定因を加えると、Mが1, FMが1, Csymが1, 増える。

$M < \Sigma C$, $FC < CF$, $M < FM$, F%の多さ, Fcの存在, などから、前回の Case C と同様、繊細さや敏感さをもつことや、何か内的緊張や固さをもつことが指適できる。

反応内容は、形がそうだからという説明が多く、筆者が努力して見ても納得のしにくい場合もあった。もし筆者が誘導質問をすれば、例えば、カード VIII の人の顔のように、どんどんイメージがわいてくるように思われた。何か悲しい場面の想像(イメージ)を、この被験者はよくするようである。色聴実験の時の反応内容にも、さみしい思いという感情表現をしている。

同様の感情反応は、Case A にもみられた。両者の間には、何か共通するような情緒体験があるのであろうか。

Case A, B, C, D のロールシャッハ・テストの結果を比較すると、いずれも色彩に対する反応が多くみられ、 $FC < CF$ である³⁾。また材質に対する反応もみられた。これらは4人に共通する特性となった。これら4人のテスト・スコアを一覧表にしたのが、表1であるが、表1にはさらに浜・日比野(1985)の資料を加えてある⁴⁾。

Table 1. Rorschach scores.

	浜・日比野					
	HV	LV	Case A	Case B	Case C	Case D
R	*40.1	25.1	46	48	81	43
W%	67.8	63.4	17.4	31.3	13.6	11.6
D%	25.6	25.3	65.2	58.3	54.3	58.1
M	5.8	3.5	7	6	3	1
FM	*4.5	2.9	6	2	10	2
Fm						1
m	2.4	1.6		2		
K			1			
FK				2		
F	*14.2	8.9	21	24	52	30
Fc	3.3	2.5	4		4	1
cF				2		
c		0.2				
CF				1		
C'	2.7	2.0				
FC	*6.1	2.8	1	1	4	2
CF	1.6	1.5	5	8	8	4
Csym			1			
Sum C	5.1	3.0	7.0	8.5	10.0	5.0
F%	35.1	25.9	45.7	50.0	64.2	69.8

浜・日比野の資料は、視覚心像高鮮明群(HV)と視覚心像低鮮明群(LV)別のスコアで、Klopfer法に従って得点化されたものである。HVは11名、LVは10名の各々平均値である。表中にある*印は、HVとLVの間にも検定を行ない、10%以下の水準で有意差のあったものである。

Case A, B, C については特に視覚心像(イメージ)が鮮明であるかどうか調査していないが、音楽をきいている時や本を読んでいる時のイメージの豊かさにつ

いては、明らかである。Case D は先に述べたイメージ調査で、イメージの鮮明さは高いといえよう。したがって、これら4人はHVと同様に考えられる点もある。その上で、色聴所有者としてのロールシャッハ反応の特長と、HV・LVの反応傾向と比較してみる。

R (反応総数) はHVと同様に、反応数は多くなっている。

W%とD%の割合は、HV・LVと4人の間では、全く逆の結果を示し、D%の方が圧倒的に多くなっている。4人の知能の程度を問題にする必要はないであろう。多くの部分反応があること、しかもそれらの形態水準は、あまりよいとはいえないことを合わせると、彼女らの心にある幼児性の存在を認めることになる。

4人のFM数を単純に平均すると、5.0になりHVと同様の傾向を示す。

色彩反応では、HV・LVともFC>CFであるが、4人の場合は、FC<CFであり、繊細さや情緒性が現われていると見てよいであろう。色聴所有者の特長として、色に注目すること、があげられよう。

F%がHV・LVに比べ、かなり高いものとなっており、普通の成人では問題にすべき数値のものもいるが、想像力の乏しさには結びつかない。逆に子どものもつ想像性を考えてもよいのではないと思われる。

これらのことから、視覚心像が鮮明に行なえる被験者(HV)と同様の傾向もあるが、色聴所有者と思われる4人の反応は、HVの人々とは異なった傾向をもつことが明らかになった。この異質さが、1つの特長となるのであろう。

2) Y-G 検査

テストの結果を、D・C・I……Sの順に、傾向の強く現われたものを記述すると次のようになる。気分の変化大、神経質、主観的、攻撃的、のんき、思考的外向、支配性大、社会的外向。(B型)

前回の報告で述べたが、神経質・攻撃的・のんきの3つの点で共通した傾向を示した。

3) GAT (田研式・不安傾向診断検査)

各々の不安傾向偏差値を次に示す。

学習不安傾向：9	対人的不安傾向：8
孤独傾向：4	自罰傾向：9
過敏傾向：3	身体的徴候：3
恐怖傾向：4	衝動傾向：8
総不安傾向：57	

攻撃性や衝動性の存在がこの検査からも現われた。

4) CAS (不安診断検査)

各因子ごとの標準点を次に示す。

自我統御力欠除：7	自我の弱さ：5
パノイド傾向：8	罪悪感：5
衝動の緊迫：6	
総合得点：7	

不安が普通より高い傾向はあるが、衝動性はこの結果からは、明らかにならなかった。情緒の不安定さは現われている。

今回のCase Dの人となりとは、子どもの頃、身近くに音楽があり、それに対してきれいな音だったという記憶があること、子どもの頃的情绪体験によると思われるが、悲しさやさみしさの情緒的反応をしやすいくこと、また子どもの時の体験が基になると思われる、攻撃性や衝動性があること、ロールシャッハ・テストでは前回までの被験者と同様、色彩反応が多くみられたことなどが特性としてとらえられた。さらに、今回の被験者に特に感じられたことは、被暗示性の問題である。自己催眠のような状況を作り、自己暗示により幻覚を見るように、イメージではなく見えてしまうこと、この点を今後は注目したいと思う。

要 約

1. 本研究は、色聴実験や面接・性格検査を実施し、色聴の現われ方や人格特性の分析を行い、色聴所有者の特性を明らかにするものである。
2. 色聴反応は、単音に対する反応はみられなかったが、被験者の好みの曲には反応があった。
3. 色聴反応は、音楽と自分が一体になる感じがする時には生じる。この点は他の被験者(Case A, B, C)と同様であった。
4. この音楽との一体感を自己催眠のプロセスで考えることも、今後必要となるであろう。
5. 色聴反応とは言っているが、今回の被験者は、色を感じないと言っている。一見白黒テレビを見ているようだという。形と動きがあった。
6. 生育史や性格検査から、幼少時の情緒体験がいろいろな意味で、パーソナリティに影響していること、子どもらしい情緒性、繊細さや敏感さをもつこと、心の中に不安や固さをもつことなどが明らかになった。
7. ロールシャッハ・テストでは、単に視覚イメージが鮮明にできる人々とは異なる反応傾向を示すことがわかった。特にW%とD%の割合、F%の多さ、色

彩反応の多さなどがそれである。これらの結果は、今後の研究でも同じ傾向が現われるか、検討を続けたい。

引用文献

- 1) 古矢千雪 音楽的知覚に関する研究(VII) ——色聴所有者の人となりと反応分析——広島文化女子短期大学紀要 1985 18 77-83
- 2) M. クリッチュリー & R. A. ヘンスン編 (拓根秀

臣, 梅本堯夫, 桜林仁 監訳) 音楽と脳 I サイエンス社 1983 295-317

- 3) 古矢千雪 音楽的知覚に関する研究(VI) ——色聴所者の人となりと反応の分析——広島文化女子短期大学紀要 1984 17 85-94
- 4) 浜 治也・日比野英子 視覚心像および触覚心像の鮮明さとロールシャッハ反応 日本心理学会第49回大会論文集 1985 308

Summary

This study is a continuation of the last study to analyze the phenomena of color hearing and the character of the color hearer using the life history and personality tests, Rorschach Test, Y-G Test, GAT and CAT. The subject was a female student from a women's junior college who was selected from the preliminary inquiry.

The main results were as follows:

- 1) She could perceive the phenomena of color hearing in her favourite music, but not in single tones.
- 2) She could not perceive the phenomena at any time, she reported, could only perceive the phenomena when she gave body and mind to the music. Mental elements worked on the perception of color hearing.
- 3) She reported that the experience of color hearing was something like looking at non-color TV with closed eyes, but there were the perception of distance and three-dimensional perception.
- 4) It is possible that she may have be subjected to her own suggestion using her favorite music and she may saw the illusion. I pay attention to the relation to this self-hypnotic state and the phenomena of color hearing.
- 5) From the analysis of the tests and her history, her characteristics were as follows: undergoing an influence of emotional experiences impressed her in her childhood; having sensitivity; having many color responses in Rorschach Test; and having an anxiety. This was similar to the result of the last study.